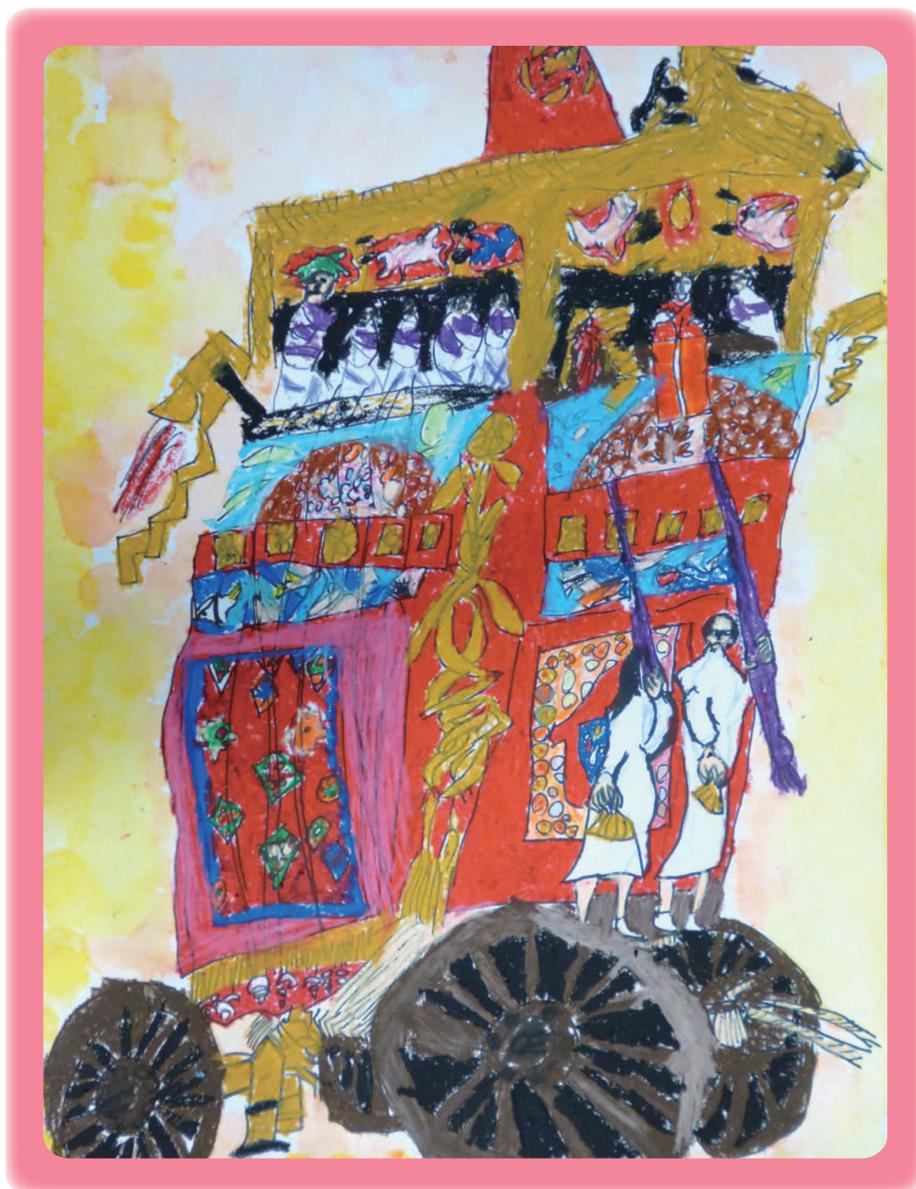


KYOKY

134

特集 教職キャリア高度化センターが発進します



京都教育大学

<表紙>

『大きな鉦、大きな夢』

附属京都小中学校初等部 4年 宋 亮太郎

ぼくは、社会の学習を通し、祇園祭は、やはりすごく楽しい祭だから、これからも続けられてほしいと思いました。さらに、巡行している鉦に乗って、楽器を演奏したり、鉦から下を見てみたいなどと思いました。最近、外国人の人たちをよく見かけるので、祇園祭を知ってもらいたいと思いました。

「大きな鉦」が目立つように、車輪を大きく、立体的に描くように工夫しました。

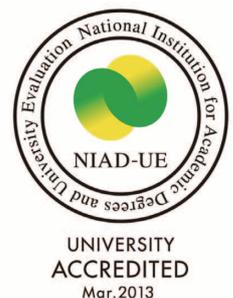
<裏表紙>

『みんながみてる祇園祭』

附属京都小中学校初等部 4年 荒川 大和

ぼくは、社会の学習で、祇園祭を見学し、ボランティアをとってしてみたくなりました。理由は、昔から受け継がれてきた道具に触れるからです。ぼくは、百年後には、休み山も復活して、海外でもやってみてほしいと思いました。

鉦の屋根の縞模様を絵の具でにじませて、工夫したところが気に入っています。



CONTENTS



- <表紙> 附属京都小中学校初等部4年 宋 亮太郎
<裏表紙> 附属京都小中学校初等部4年 荒川 大和

特集

- 2 教職キャリア高度化センターが
発進します
教職キャリア高度化センター

海外見聞録

- 7 オーストラリア
ベレア小学校との交流
附属桃山小学校教諭
高橋 詩穂

留学生の声

- 9 経験豊かな1年間
日本語・日本文化研修生
アクメシェ・ベルナ
(トルコ出身)

研究余滴

- 11 うたい合う中で育つ子どもたち
幼児教育科准教授
平井 恭子

京教今昔物語

- 13 多くの人に支えられてきた
附属農場と環境教育実践センター
環境教育実践センター教授
梁川 正

京教学内探訪

- 15 「Sカフェ」って何？
～大学生による大学生のための
支援プロジェクトやっています～
保健管理センター教授
森 孝宏

附属学校園だより

- 17 校舎に響く合唱
附属京都小中学校（中高等部）副校長
橋本 雅子

- 18 2014年度研修旅行を終えて
～北海道研修旅行の取り組み～
附属高等学校副校長
市田 克利

- 20 リニューアルされた中学部高等部棟
附属特別支援学校副校長
高岸 正司

新任の先生から

- 21 教育神経科学の未来
数学科教授
黒田 恭史

- 21 教師という仕事の魅力
教育支援センター准教授
今野 勝明

- 22 教師養成の一助となれば
～高校教師の経験をいかし～
大学院連合教職実践研究科教授
石川美智子

- 22 未来を拓く教育のために
教職キャリア高度化センター・
大学院連合教職実践研究科教授
橋本 京子

卒業生の声

- 23 笑顔で向き合う
高槻市立磐手小学校 教諭
池原 史明

- 23 『人とのつながりを力に』
京都教育大学附属京都小中学校 教諭
小澤 雄生

ようこそ大先輩

- 24 最初の外国人留学生とインドネシア海外調査
京都教育大学名誉教授（教育学科心理学研究室）
矢野 喜夫

学生広報委員会

- 25 学生広報委員会の紹介

- 26 今年もよく刺された!! ～京教の蚊特集～

読者の皆さまへ・編集後記

- 29 地域連携・広報委員会委員長
細川 友秀

教職キャリア高度化センターが 発進します

教職キャリア高度化センター

「教職キャリア高度化センター」（以下、「本センター」と略します）は、平成26年7月23日に開所式を終え、ここに名実ともに本学附属教育実践センター機構に属する5番目のセンターとして、新たな一歩を踏み出すことになりました。



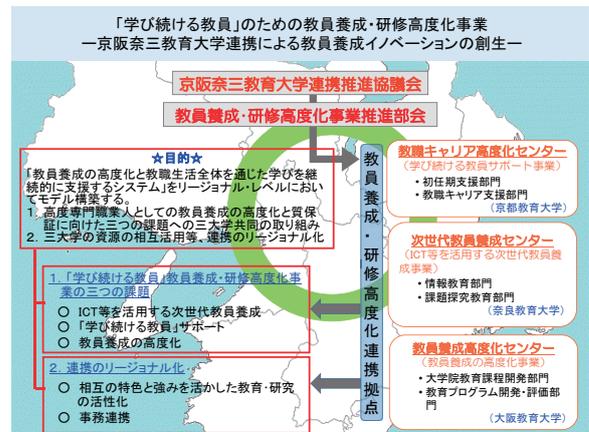
「センター開所式」

この度、機会を得て本センターの概要を本誌にご紹介するにあたり、まず、本センターが京阪奈三教育大学連携による「『学び続ける教員』のための教員養成・研修高度化事業」のもとに生まれたものであることをご説明します。同事業の目指すものは、「教員養成の高度化と教職生活の全体を通じた現職教員の学びを継続的に支援するシステムモデルを、リージョナルレベルで構築する」ことです。すなわち関西を主たるエリアとし、高度専門職業人としての教員の養成の高度化と、その質保障のための課題への取り組みを強化するとともに、三大学が有する資源の相互利用の促進を目指します。なお、ここにいう課題とは、「ICTを活用する次世代教員の養成」「学び続ける教員のサポート」「教員養成そのものの高度化」を指しています。

そのために、奈良教育大学に「次世代教員養成センター」を、大阪教育大学に「教員養成高度化センター」を、そして京都教育大学に「教職キャリア高度化センター」を立ち上げました。次世代教員養成センターと教員養成高度化センターは昨年度初めにすでに発足・開所していますので、これらに遅ればせながら本センターが加わって、ようやく教員養成・研修の高度化のための地域連携拠点が出そろったこととなります。

大学が学部や大学院で教員を育てて送り出すのみという時代は終わり、教職生活の全般にわたって、ライ

フステージに応じて教員を支援することが求められるようになりました。本センターは、この大きな理念的枠組みのもとに「初任期支援部門」と「教職キャリア支援部門」の二つの部門を設けています。初任期支援部門では、教職キャリアの特に初任期（1年目～3年目）の段階で困難を抱える教員を支援するとともに、その職能の向上を旨とします。教職キャリア支援部門では、初任期に限定することなく教職キャリアの全体を通して、教員の修士レベル化に対応する学習プログラムを開発・実践するとともに、修士レベルをも超えたさらに高度な専門性を養うプログラムの開発を目指します。そして、これらのプログラムを通して、日々の授業や業務をこなしながら、大学院に行かずとも、教育の基礎や現代的な課題に関する修士レベルの学修ができる場を先生方に提供したいと考えています。



「京阪奈三教育大学連携」

以上の事業を実行、発展させるにあたって必須となるのが組織です。本センターには現在、兼任センター長（1人）、専任教員（3人）、兼任教員（5人）の計9人の教員が所属しています。このうち専任教員の2人は京都府・市教育委員会から推薦された（退職）校長職経験者で、連合教職実践研究科（教職大学院）の授業も担当しています。兼任教員の2人は京都府・市教育委員会から派遣された現職の幹部教員で、教育支援センターに属して学部（教育学部）の実地教育関連授業を担当しています。さらに教育学部・教育学研究科（既存大学院）に属する教員がセンター長を含めて4人、教職実践研究科に属する教員が1人の計9人が構成員です。このように本センターは、京都府・京都

市教育委員会との密接な連携をふまえつつ、本学の教員リソースをほぼ網羅する形で構成されています。

変化の激しい現代社会において、教員に求められる能力も日々変化しています。今後は、コミュニケーション力や同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力、等々の総合的な人間力がますます求められるようになって考えられます。これらの今日的要請にも対応しながら、これからの新しい教員養成のあり方を、リージョンを超えて広く日本に発信していきたいと思っていますので、皆様のご支援をどうかよろしくお願いいたします。

(教職キャリア高度化センター長 教授 水山光春)

具体的なプロジェクトの実施にあたって

本センターは、平成25年10月1日に設立されました。未だ日が浅いこともあり、後述する「学校経営改善に関わる講座」と「特別支援教育に関わる講座」を除き、これまでは主に今後の具体的なプロジェクトの実施に向けて調査と分析ならびに話し合いを重ねてきました。その一つとして、平成26年2月上旬には、教員研修に関する意識と実態を明らかにするため、全国の幼小中高教員を対象にインターネット調査を行いました。調査の結果の一部ですが、図1のように、教員が昨年度1年間に参加した研修の中で「大学が主催する研修」には、あまり参加していない（選択肢の中では最も少なかった）ことが明らかになり、また、図2のように「参加意欲のある教員研修」を横軸に、「役立つと思う教員研修」を縦軸にしてプロットし、参加意欲度と役立ち度の関係を見てもみると、当然ではありますが、現場教員にとっては明日からの実践にすぐに

昨年度1年間に参加した教員研修①

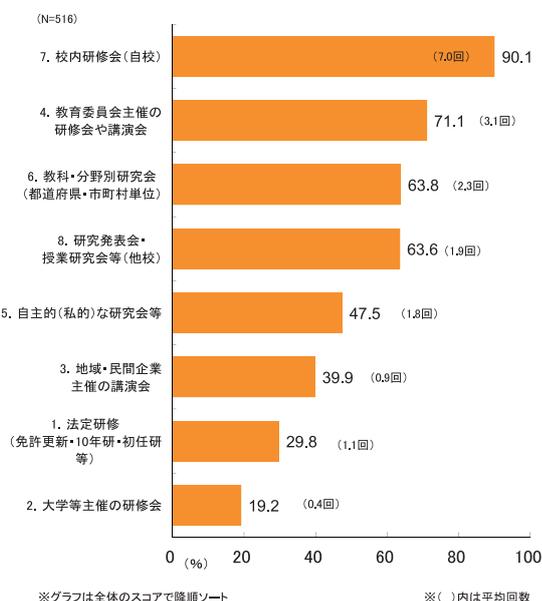


図1 昨年度1年間に参加した教員研修

役立つような研修の評価が高いことがわかりました。

現場の先生方にとって、現時点で大学が主催する研修については、興味関心が低く、あまり役立っているとは言えません。そこでまずは「教師教育の高度化(教員養成の高度化と教員研修の高度化を包含)」に関する社会的背景と長期的な視点にたった効果や影響を先生方に認知していただく必要があります。つまり、前述しましたが「現職教員が大学院に行かずとも、教育の基礎理論や現代的な課題に関する修士レベルの学修を受ける」意義を理解していただくとともに、それが体感できるようなプログラムを提供していくことが大事だと考えます。

「高度化」に向けた社会的背景とその効果

平成24年8月の中教審答申では、教員を「高度専門職業人」と位置づけていますが、すでに少し前より欧米諸国においては「教師教育の高度化」「専門職化」が一般化しており、この点でわが国は少し出遅れたと言えます。このような中、昨年末に文部科学省より出された教員養成分野へのミッションの再定義では、未だ設置されていない都道府県を中心に教職大学院の設置が検討されています。このことは本格的に教師教育の高度化に向けた新たな制度設計の準備が始まったと捉えるべきところですが、現実的には100万人以上いる現職教員の高度化を速やかに実施していくことはかなり困難であり、さらなるこれからの工夫がその成否を決定づけると言っても過言ではありません。よって、本センターの使命と役割は、近い将来の制度としての高度化を補完する点から、ますます重要になると

教員研修の参加意欲と役立ち認知度の関係

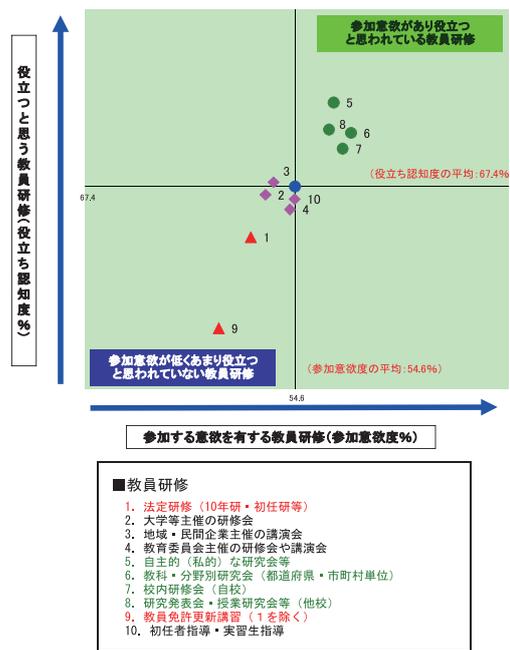


図2 教員研修に対する参加意欲度と役立ち度の関係

思っています。

また、前頁に記した調査では、修士レベルの学び、つまり「教員研修の高度化」の効果を検討するため、「大学院修了教員（n=67）」と「その他の教員〔大卒・短大卒〕（n=449）」との比較分析を行っています（統計処理は、回答割合の差を検定）。分析の結果の一例を紹介しますと、例えば、大学院修了教員は、そうでない教員に比べ統計的に有意に「大学等主催の研修会」に参加経験が多く、また「教育政策や教育動向」を必要と考え、加えて「大学でのさまざまな研修」「大学院などの長期研修」に「参加したい」と思っていることが判明しました。総じて、修士課程を出ている教員は、高度専門職業人が備えるべき「学び続ける意欲」が高く、高等教育機関での学びを求めるとともに、E-ラーニングに関しても、「学ぼうとする意欲」が高いと判断できます。もちろん、もともとこのような資質能力を備えた教員が大学院に進学した可能性もあるため、この結果は大学院修了との因果関係を直接証明するものではありませんが、修士レベルの学びの効果を推察する上では貴重な知見です。

高度専門職業人は、別名「省察的实践家」と呼ばれますが、学校教育の課題が複雑化・多様化する今日において、教員は豊かな経験とともに、学際的内容に基づいて、日常の実践を振り返り、自分の考え（理論）を導き出す必要があります。この行為の繰り返しが、教員としての「臨機応変さの引き出し」を増やすことにつながるのです。本センターが提供する各種プログラムは、現職教員の普段の「理論と実践の往還」に活用され、貢献することを目指しています。

（教職キャリア高度化センター 教授 小林 稔）

教職キャリア支援部門

中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」に、教育委員会、大学等の関係機関がそれぞれ責任を果たしながら

その連携・協働により、教員の養成、継続的な学習に対する支援を行うことが重要です。特に、教育委員会との連携・協働を率先して行い、他の具体的なモデルとなることが期待されます。主な役割としては、「管理職や教員に求められる資質能力を協働で明らかにすること」「実践的指導力を育成する教員養成カリキュラムを協働で開発すること」「大学と教育委員会、特に総合教育センターとの一体的な体制の構築」「現職研修プログラムを協働で開発すること」等があげられます。

本教職キャリア支援部門では、教職生活全体を通じて学び続ける教員を対象として、修士レベルに対応できる学修プログラムを策定するとともに、高度な専門性（例えば、いじめ・不登校・特別支援教育・グローバル教育の現代的諸課題への対応）を養うことを目的とするプログラム、及び教科指導、生徒指導、学級経営を実践する力量を高めるためのプログラムや探究的学習の授業を実践・コーディネートする力量を高めるためのプログラム等々を開発・実施します。

修士レベル対応学修プログラム

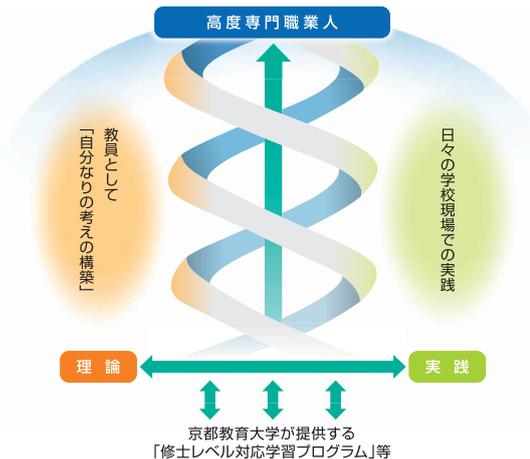
日々の多忙さの中にあって、学び続ける意欲を持ち続けながらも（教職）大学院に通学する時間と資金を生み出すことが困難な現職教員を支援するために、毎日の授業や日常業務を遂行しながら、現代的な教育課題等（学校経営・特別支援教育）に関する理論が学べるプログラムを京都府・京都市教育委員会との協働のもと開発しています。

加えて、「教育の基礎理論（教育哲学・教育社会学・教育心理学・学校経営）と教科教育論」に関する講義動画を作成しています。本講義動画は、事前に登録した現職教員がいつでも学校内外で見ることができ、「理論と実践の往還」のための補完資料として活用するためのWeb教材コンテンツとして蓄積しています。これらのプログラム開発などにより、教員一人一

教職キャリア支援部門

教職生活全体を通じて学び続ける教員に向けて、修士レベル化に対応できる学修プログラムを開発し、実施する。さらに、高度な専門性を養うプログラムを開発し、実施する。

- ①いじめ・不登校、特別支援教育、グローバル教育等の現代的諸課題への対応を目的とするプログラムの開発と実施
- ②教科指導、生徒指導、学級経営を実践する力量を高める学修プログラムの開発と実施
- ③探究的学習の授業を実践・コーディネートする力量を高めるための学修場の構築
- ④学校経営改善等、高度の専門性を身につけるためのプログラムの開発と実施



人が真の高度専門職業人を目ざし、理論と実践の往還をよりスムーズに行うための環境整備を整えます。

今後、こうしたモデルを追求しながら、修士レベルでの学びを教職生活全体の中に組み込んでいくことが、時代の変化に対応した教員の資質能力向上において望ましいと考えられています。また、いじめ・不登校等生徒指導上の諸課題への対応、特別支援教育の充実、外国人児童生徒への対応、ICTの活用の要請をはじめ学校現場における課題が高度化・複雑化しているとの指摘があります。教科指導、生徒指導、学級経営等の職務を的確に実践できる力の育成に寄与する「教職キャリア高度化センター」でありたいと考えています。

(教職キャリア高度化センター 教授 桶谷 守)

初任期支援部門

1 現職教員のためのポートフォリオの目的と意義

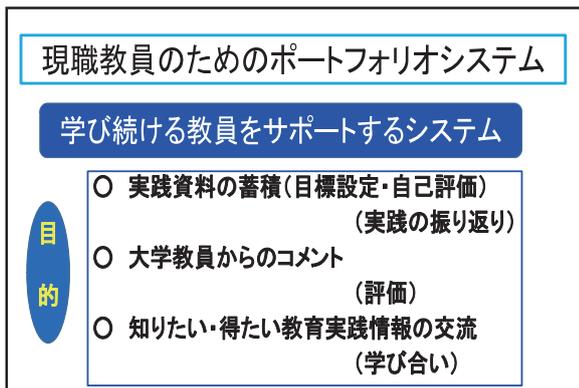
「現職教員のためのポートフォリオシステム」とは、初任期段階（1年目～3年目）の教員が自ら「学び続ける教員」として、実践的指導力を向上させるため、日常的な業務を遂行しながら活用できる自己研修のための支援システムです。

教員は日常的に、様々な指導案や教材等を作成しています。それらの教材等を整理し記録としてポートフォリオにし自己の成長を振り返ったり、指導案等を専門的な立場から検討・評価されたりすることは、教員のキャリアスタートの時期において、成長の糧につながります。

また、実践を同じ経験年数の教員間で同僚性をもって交流し、学び合うことも実践の力量を切磋琢磨する機会として有効です。しかし、教員の生活は年々多忙化し、日常的に自己研修を積む機会を逸してしまうことがあります。

こうした教員生活を踏まえて、日常業務を遂行しながら職場や自宅などで自己研修に取り組めるWebを活用したポートフォリオシステムを構築しました。

このWebシステムを初任期の教員が活用することによって、授業改善や生徒指導等のフィードバック、

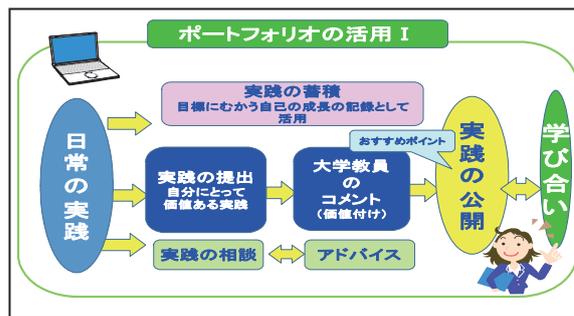


実践の相談など、大学が現職教員に対して行う「学び続ける教員」のサポート体制を充実します。

2 ポートフォリオの活用について

平成26年度のポートフォリオの活用募集対象は、京都府・京都市の初任期教員100名です。

ポートフォリオの活用にあたっては、自己の実践の目標設定を行い、目標に照らしながら成長を自己評価ができるようにします。また、このシステムには主な活用の仕方が三つあります。



①実践の蓄積

自ら作成した教材等をデジタルデータ化し、個人フォルダーに自己の成長の記録として蓄積します。また学校で作成途上の教材も個人フォルダーに保存すれば、自宅で続きを作成でき、情報管理の安全化が図れます。

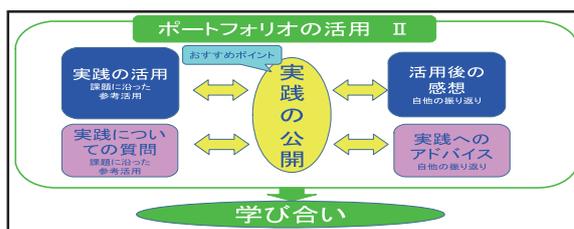
②実践へのコメント・学び合い

年に2回程度、自分にとって価値ある実践を大学に提出することによって、大学教員が分析し、「おすすめのポイント」として評価します。また、これらの実践については公開の許諾を得た後、Web上で公開し、登録者同士が活用したり感想を述べ合ったりして交流し、学び合うことができます。

③実践の相談

授業実践について相談がある場合は、実践の提出の機会を活用することでアドバイスを受けることができます。

多忙な中での実践を日常的にサポートするポートフォリオの活用によって、実践的指導力を高め、自ら「学び続ける教員」としての成長を支援し続けられるよう、さらに充実させていきます。



(教職キャリア高度化センター 教授 橋本京子)

学校経営改善に関わる講座

1. 講座のねらい

学校教育への期待の高度化に伴い、学校における組織経営の重要性が高まっています。したがって、学校管理職やその候補者、さらには学校組織の中核を担うミドル層のマネジメント力の育成が重要な課題となっています。特に大量退職時代に入り、学校管理職の若年化が進んでいることから、学校経営に関する体系的な研修講座を整備していくことが求められています。以上のことから、学校経営関係講座は、京都府、京都市における学校管理職の育成、次世代を担うミドル層の育成をねらいとして実施しています。

2. 講座の内容

講座の内容は、これまで京都府、京都市の総合教育センターにおいて実施されてきた研修講座を踏まえながら、これまでに京都教育大学連合教職大学院の選択科目として実施してきた「学校経営改善講座」の成果を活かして策定されています。



(1) 京都府総合教育センターとの連携講座

教諭を対象として、ミドルリーダーに期待される学校運営の力量を高めることを目的とする「学校運営特別講座シリーズ」(3講座)、主幹教諭、指導教諭、教諭を対象として、学校組織マネジメントの考え方、手法を特色ある学校づくりに積極的に生かす人材を育成する「学校組織マネジメント特別講座シリーズ」(2講座)、地域における中核となる学校事務職員を育成することを目的とする「学校業務改善講座シリーズ」などがあります。

(2) 京都市総合教育センターとの連携講座

管理職やその候補者を対象として学校経営力をはじめとする多様な資質及び力量の向上を図る「学校経営力向上講座」(3講座)、ミドル層を対象として学校経営に積極的に参画していく中核的教員の育成を図る「ミドルリーダー育成講座」(2講座)などがあります。

(連合教職実践研究科 教授 笠沙知章)

特別支援教育に関わる京都府・京都市との連携

日本は、2014年1月に『障害者の権利に関する条約』に批准しました。今後、「平等を促進し、及び差別を撤廃することを目的として、合理的配慮が提供されること」ことが求められます。すなわち、教員一人一人が発達障害等を正しく理解することや、発達障害に関する専門的・実践的知識を有する教職員の育成が重要となるのです。

1. 小学校・中学校の教職員向け発達障害の児童生徒理解のためのDVD開発

ユニバーサルデザイン教育など、すべての児童生徒にわかりやすい授業づくりにも、特別支援教育の理念が深く関わっています。平成25年度に作成した本DVDは一人でも多くの先生方が特別支援教育に関心を持ち、特別支援教育の基礎・基本、特別な支援を必要としている児童生徒の理解・支援の方法について学んでいただくことを目的として作成し、京都府・京都市のすべての小学校・中学校等に配付しました。



このDVDの活用方法は、

- 1) 特別支援教育について個人で学ぶために活用する
- 2) 特別支援教育の校内研修に活用する
- 3) 特別支援教育支援員、学生ボランティアの研修に活用する
- 4) 保護者等の啓発に活用する

などがあると考えます。

平成26年度は、高等学校向けのDVDを作成する予定です。

2. 特別支援教育担当中核教員スキルアッププログラムの開発

京都府・京都市の通級指導教室担当、特別支援教育コーディネーター等、小中高等学校の特別支援教育の中核的役割を果たす教員に対してスキルアッププログラムコンテンツを開発し、そのコンテンツを配布すると共に活用に向けた研修会を開催します。

発達障害のある児童生徒への支援にあたっては、教員一人一人が、研修等により発達障害に関する正しい知識を習得するとともに、児童生徒への適切な指導や、保護者等に対して十分な説明を行い、理解を得る必要があります。そのため、各圏域あるいは各学校において、発達障害に関する支援の中核的となる高度な専門性を有する教員の存在が重要となります。

平成27年度は、『発達障害のある児童生徒への対応に関する学校の運営・管理の在り方の研修プログラム』を策定する学校経営プログラム』の開発に取り組む予定です。

(特別支援教育臨床実践センター 教授 相澤雅文)

オーストラリア ベレア小学校との交流

附属桃山小学校教諭 高橋詩穂

本校と南オーストラリア州アデレード市にあるベレア小学校（Belair primary school）との交流は、今年で16年目になる。隔年で両校の代表児童が互いの学校を訪問している。今年度は、本校から41名の代表児童がベレア小学校を訪問した。子どもたちは一人ずつ各家庭にホームステイをしながら、学校でのさまざまなプログラムや農場体験などに参加する。子どもたちはオーストラリアのすばらしい自然や人々のあたたかい心に触れ、多くのことを学ぶのである。

ここでは、ベレア小学校に滞在する中で垣間見えてきた学校の様子を中心にお伝えしたい。

ベレア小学校には、1年生から7年生が在籍する。1・2年生、2・3年生、3・4年生といった異学年混合のクラス編成となっている。どのクラスに属するかは毎年試験が行われ、その子の力に合わせて学級を決めることになっている。ベレア小学校は、国際バカロリアのプログラムに基づいて教育活動を行っている。

ベレア小学校初日には、7年生の代表児童が小学校の案内をしてくれた。ベレア小学校には制服があるのだが、7年生だけは特別の制服がある。なぜかと尋ねると「私たちは特別な。学校のリーダーだから。」と、自信たっぷりに答えてくれた。



7年生による学校案内
校内にある日本庭園について紹介してくれている

ベレア小学校の中には、時折コアラも訪れてくるような学習の森がある。案内をしながら、捨てられていたゴミを自然と拾う姿が見られた。オーストラリアでは近年環境教育に力を入れており、自然環境を大切にするためにゴミの分別やリサイクルも授業の中で取り組まれている。

図書室に案内されると、入ってすぐに日本文化のブースがあった。さらに、さまざまな国（や民族）の絵本

などがたくさん置かれており、子どもたちが自然に多様な文化に触れられるようになっていた。近年オーストラリアは多くの移民を受け入れている。案内してくれた子も、図書室に掲示されている世界地図を指さしながら、「わたしのお父さんはスコットランドから、お母さんはフランスから来たの。」といったように、彼らを取り巻く環境はさまざまな文化や価値観にあふれている。学校内の掲示を見ても、先住民の文化に関するもの、多文化共生に関するものであふれていた。

1年生の教室に訪問すると、子どもたちが日本語で自分の名前をいいながら挨拶をしてくれた。ベレア小学校では、（第2言語として）日本語の教育に力を入れており、週に2回専門教員による授業がある。子どもたちは、今回の訪問に合わせて用意したカタカナで書いた名札をつけて、日本の子どもたちに会うと積極的に「こんにちは」「わたしの名前は～」と話しかけてきてくれた。

1年生の子どもたちと一緒に、Artsの授業を受けたが、先生はそれぞれの色を日本語でも指示しながら授業を進めていた。子どもたちはクレパスを手取る度に、「MIDORI」と日本語で友だちと確認し合いながら塗っていた。日本語クラスだけではなく、日常的に取り組むことで、子どもたちも日本の文化により親しみを持てるのではないだろうか。



1年生との交流
一人ずつ日本語で挨拶をしてきている

同じ校舎内に5歳児の幼稚クラス（reception）もある。幼稚クラスの隣は、1年生の教室となっており、自然と子どもたち同士の交流も生まれてくる。幼稚クラスは2クラスある。ちょうど、授業を視察したときには、わらべうたで遊んだり、三角や四角といった形あそびをしたりしていた。ベレア小学校では、ICT

機器を積極的に活用している。電子ボードに映し出された形を無理なく操作している姿が印象的であった。さらに、「安全」についての学びも参観することができた。昨今オーストラリアでも子どもの安全を守ることが大きな課題となっている。オーストラリア政府は、子どもの安全を守るハード面の強化はもちろんのこと、子どもたちが自分の身をどのように守ったらよいかを学校で指導するように決めたようである。その日は、まず自分にとっての安全とは何かを考えさせていた。「両親と一緒にいるとき」「車でシートベルトをしているとき」と子どもたちは日頃の生活場面の具体例を挙げながら発言していた。次に、「もしもお母さんとはぐれてしまったらどうするのか」「火のそばではどうしたらよいか」など、その時どのような行動をすればよいかを、子どもたち同士で考えさせ、実際にロールプレイングをしてみる。そして、グループ毎に話し合ったことを発表するといったように、ペア活動やグループ活動を積極的に取り入れていた。子どもたちはしっかりと自分の意見を述べることができ、友だちの話に静かに耳を傾けていた。クラスの担任にそのことを話すと「子どもたちは話すことはとても得意だよ。聞くよりもね。」との返答に、どこかできた子どもの姿だなと笑いあひながら指導について意見交換をすることができた。



幼稚クラス
グループで話し合った安全行動について発表している

さて、7年生では、政府についての学びが展開されていた。政府の仕組みや、歴代の首相の働きなど、政府が自分たちの生活とどのような関わりがあるのかについて学んでいた。学習したことをもとに、子どもた



7年生が表現した政府に関する制作物

ちは自分なりの考えに基づいて、制作物として表現していた。

そして、自分がつくったものをもとにスピーチをしていた。全体的な学びの後、子どもたちは各々興味をもったことを調べていく。ちょうどスピーチをしてくれた子は、オーストラリアの教育に関して話していた。彼女のスピーチに対して、質問を投げかけたり、コメントをしたりしながら進められていった。このような取り組みは本校でもスピーチ活動として重点的に行っている。7年生のクラス担任も、「子どもたち同士の学び、教え合い、コミュニケーションを大切にしている」と話しており、国は変われど、教師として大切にしたいことに変わりはないと感じた。



7年生がスピーチをしている様子

そういった子どもたち同士の学び合いに、言語の壁は高くはない。学校のすぐそばにある国立公園で、ベレア小の子どもたちが、南オーストラリアの自然について、本校の子どもたちに教えてくれた。自然に関する絵本を読み聞かせてくれたり、湖の中にいる生き物を一緒に顕微鏡で探したり、子どもたちは一緒になってオーストラリアの大自然を楽しみながら学習することができた。そこでも、「子どもたち同士で学び合うことが大切なんだよ。」と担当の教師が話してくれた。



国立公園での交流

最後に、ベレアのスタッフとの会話の中で非常に共感した言葉を紹介したい。「私たち教師は常にチャレンジしつづけなければいけない。いかに困難な状況にあらうとも。それは子どもたちのためになすべきことであり、そのことによって教育はよくなっていくのだ。」

経験豊かな1年間

日本語・日本文化研修生 **アクメシエ・ベルナ**
(トルコ出身)

来日は4回目なのだが、前の滞在と違って、実際に生活するのは初めて。留学という夢が達成して幸福だったが、1年間という長期間のせいで心配も勿論抱えていた。しかし、来てから大体10ヶ月経ち、全然長くなく、逆に、あっという間じゃないかと思ひ、時は水のように流れているとよく感じている。

日本留学は随分前からの目標であったのに、2013年9月30日の夜関西国際空港に到着したとたん孤独な気分が襲ってきた。リムジンバスに乗り、人里離れた向島留学センターに着いてから失望し、正直に言う「こんな場所で一年って無理」と思いながら涙がとめどなく流れ落ちた。

シーツさえないベッドで目が覚めて、他の国からの留学生に会うためにラウンジに降りた。初回で愉快な話ができ、寂しさが軽くなってきた。一緒に京都教育大学への行き方を教えてもらい、オリエンテーションを受け、昼食をとった。あの時、新家族ができたとは全く知らなかった。

時間が経つにつれて仲良くなってきた留学生6人で、2014年1月中旬に向島から引越し、一軒屋を借りた。学校から自転車で10分もかからない、便利で住みやすい場所であった。引越し後、自分がその日まで気付かなかった観点を得た。それは「偏見無しの方」である。国籍はそれぞれのハウスメイト。インドネシア人、ハンガリー人、キリギス人、二人のタイ人とトルコ人の私。楽しい日々もあれば、辛くて、6人で合意できない、喧嘩になってしまう日々もあった。しかし、落ち着き、視点を変え、共感し、話し合いながら、ずっとお互いを尊重しながら、何でもかんでも問題を解決し、超えてきた。引越しの前から結構



大阪城での撮影



お正月の旅行：三重県、伊勢

仲良く、親しかったのだが、今は全くの家族になっている。一人娘にできるだけ早く会いたがっているお父さん、お母さん、一緒に住んでいるお祖母さんに私も勿論会いたくて堪らないのだが、一方日本で作った国際家族から離れたくない。

留学前、先輩や先生方によく言われたのは日本人と友達になるのは大変難しく、留学生同士でしか親しめないということだったが、やはり最初の何ヶ月はこれを深く感じた。日本人は恥ずかしがりやが多く、特に外国人との会話を明らかに遠慮していると思った。ただし、私は諦めるのが嫌だし、日本人も外国人と接触する機会を増加させたいと思い、努力した。京教ダンス部に入部したり、同じ授業を受けている日本人を外食に誘ったり、遊べる場面を作ったりしながら、数え切れない友達ができ、しかも、トルコでやっていたラテンダンスを利用して、週一回大阪に通い、そこで知り合った優しい人とも積極的に話し、同い年だけではなく、お年寄りの方とも仲良くなってきた。

部活はトルコに滅多にないことである。日本の部活制度や大学生の授業以外の活動に関して学びたく、ダンス部に入部することにした。入部したばかりで「部活」という意識が無い私は困ったことが多くあり、規則やルールなどについて分からなく落ち込んでいたのが、部員に親切に教えてもらい、順応できた。ライブしたり、クラブで大宴会で踊ったりして、できるだけ彼女達に付いて行けるようにした。

折角の留学生生活を精一杯楽しんで、トルコに戻ってから日本でできなかったため後悔することを一つも残さないように頑張り続けてきた。



初ライブ。2014年1月。
場所：京教コミュニティスペース

後一ヶ月で、日本という夢が終わり、目覚まし時計が鳴ってからトルコで起きる自分。目に涙を浮かべるシーン。この12ヶ月を2ページでまとめるのが物凄く難しいが、取りあえず最も勉強になったことを述べて終わろう。

母語、国籍、習慣、文化、宗教が異なっても感情が一緒であれば十分だと今感じている。異文化は嫌がる、怖がる、文句を言うものではなく、自分が知らない世界へのドアだと思う。遠慮せずにそのドアの取っ手を回し、一步を踏み出して、異文化を受け取ろう。いかに面白いかを経験してみよう。脳に着させている偏見を脱いで、新しい服を試着してみよう。

私の成長過程の大事な要素になってくれた外国人の友達、国際家族のメンバー、彼らに会える道になった



5月のダンスパーティー



8月の大宴会

日本留学、日本語、日本人、日本。お世話になりました。これからもどうぞ宜しくお願いいたします。



うたい合う中で育つ子どもたち

幼児教育科准教授 平井 恭子

私は仕事柄、幼稚園や保育所、児童館など小さい子どもが集まる場所に入出入りすることが多くあります。先日ある児童館に行くと、外遊びをしていた1年生の男の子2人がサッカーのチームを決めるためにじゃんけんをしていました。「さいしょはぐー、じゃんけんほい」「あいこでしょ」「しょ」…、と3回で勝負は決まりましたが、威勢のいい掛け声と、息のあった動作に見ている私まで引き込まれてしまいました。

じゃんけんは2人でするものとは限りませんが、構成メンバー全員がリズムにのり、声と動作のタイミングをそろえることが遊びを成立させる大切な要因になります。このように他者が作り出すテンポを感じ取りながら、自分の声や動作を合わせることは人と人との円滑なコミュニケーションに欠かせない要素であると同時に、音楽表現を成立させるうえでも非常に重要です。先ほど例に挙げた1年生2人は、お互いのリズムをよく感じてじゃんけんを成立させていましたが、このような、他者のリズムと同調していく能力はいつからどのような過程を経て獲得されていくのでしょうか。

既にこれまでの研究で、母子の間では非常に早い段階から声や身体の動きを同期させる現象が認められています。例えば母親が愛情をこめて話しかけたり子守唄であやしたりすると、赤ちゃんがそれに対して声や動作で同期するという例は身近にご覧になった方があるかもしれません。それでは、子ども同士の間で、しかも発達段階の違う異年齢の子ども同士は、声や動きをどのように同調させていくのか、2人の姉妹の間で交わされたやりとりから、音楽的コミュニケーションの成立過程を追ってみたいと思います。

事例1 面白そう!～相手の行動に関心を持ち、動きを部分的に模倣する～



左右に大きく身体を揺らすA子

ままごとをするA子(2歳11か月)とB子(1歳3か月)

譜例1 A子のうたと動き



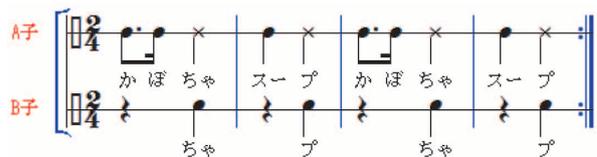
A子とB子は向き合ってままごと遊びをしています。A子は、「これ、みきちゃんの」「これ、さっちゃんの」と言いながらお皿をならべ、B子は専ら食べるのに夢中です。そのうち、たくさんのお皿を並べ終えたA子は、気分が高揚したのか、身体を左右に大きく揺らしながら譜例1のように「み～きちゃんとさっちゃん、み～きちゃんとさっちゃん…」と繰り返し唱えはじめました。まさに全身で、B子に「たのしいねっ」という気持ちを伝えているようですが、B子は知らん顔でせんたくばさみ(おかずのつもり)をぼりぼりかじっています。ついに10回ほど唱えてから、A子は一旦唱えるのをやめました。するとそれまで何の反応もなかったB子が突然顔を上げ、にこっと笑って、A子と同じように身体を左右に揺らし始めました。B子の揺れる動作はすぐに終わりましたが、それを引き継ぐように、A子は再び歌いながら揺れ始めました。

事例2 一緒にやってみよう! ～部分的に声を重ね、動きに同調しようとする～



食事中にうたうA子(3歳6か月)とB子(1歳10か月)

譜例2 A子とB子のうた



A子とB子は昼食を食べています。お父さんが作ってくれた「かぼちゃスープ」があまりにおいしかったのか、A子が頭を左右の手で交互にタッピングしながら「か～ぼちゃ、スープ、か～ぼちゃ、スープ…」とリズムカルに唱え始めました。するとB子もそれに同調し、「…ちゃ、…プ」と部分的に声を重ねながら、

A子に同調し、両手で頭のタッピングを模倣し始めました。このとき、A子は声と動きが完全に同期していましたが、B子は声と同期させて両手の動きをコントロールすることが難しらしく、両者の動きは一見ばらばらに見えました。しかし声を重ねることで、一体感がぐっと強まっています。

事例3 一緒にうたおう！～音楽的な形式が整い、交互にやりとりが繰り返される



食事中にうたうA子（4歳5か月）とB子（2歳9か月）

譜例3 A子とB子のうた

A子とB子は、茹でたブロッコリーにドレッシングをつけて食べています。まず最初にA子が「ちよんちよんちよん」と唱えながら3回ブロッコリーにドレッシングをつけ、「あ〜ん」で口に入れるという一連の動作（譜例3）を始めました（B子に「こうやって食べるのよ」ということを、ゆっくり分かりやすく教えるように）。それを見たB子は、A子がブロッコリーを口に入れたと同時に、A子が提示した音声と動きを同じテンポで繰り返しました。その後A子→B子→A子→B子…、と交互に唱えことばと動作が繰り返されました。

声や動きを同調させていく過程から見えること

事例1から事例3までは、約1年6か月の年月が流れていますが、この間にA子とB子の姉妹が徐々に音楽的なコミュニケーションを成立させていく様子がわかります。まず3つの事例に共通しているのは、年上のA子が毎回声や動きでリズムカルなテーマを提示している点です。思ったこと感じたことをリズムにのせて唱えたり、即興的に歌ったりする行動は2～3歳児によく見られ、「短いテーマを繰り返す」という特徴をもっています。まさに、A子の年代は即興歌作り絶頂期といえますが、事例1の段階ではA子の猛烈な

アピールに対してB子の反応はいま一つです。しかし、B子は決してA子のうたや動きに無関心なわけではなく、A子のうたのリズミカルな特徴を感じとったうえで動きを模倣しています。短時間かつ部分的ではありましたが、動きの模倣という形で、B子は他者とともに表現するための第一歩を踏み出しています。

事例2の段階になると、事例1の段階では見られなかった「声の重なり」が現れます。A子が提示するリズムカルな唱えことばに対して、「…ちゃ、…プ」の発声からB子が、A子の声に対して一所懸命に合わせようとしていることがわかります。また、同期はできていなかったものの、両手のタッピング動作でA子の動きに同調しようとしている様子も認められます。

そして事例3の段階では、相手の発声と動きが終わるのを待ち、タイミングよく自分のパートを開始するという、やりとりが成立します。タイミングよく自分のパートを始めるには相手パートの始まりと終わりが分かっていること、「ドレッシングをつける⇒口にもってくる」までの一連の流れが一つのフレーズとして認識されていること、提示されたテンポによって表現できること、などの条件が必要です。これらの条件を含む交互唱という新しい表現スタイルを成立させている点で、2人の大きな成長を感じることができます。

このように、子どもたちは生活の中で、楽しみながら他人と呼吸を合わせて声を出したり動きを同調させ、音楽的コミュニケーションの方法を学んでいるといえます。

乳幼児を対象に研究するということ

今回は、私が家庭で撮影したわが子の音楽行動記録約1000シーンの中から、相互表現にかかわる3事例をご紹介します。このような乳幼児の行動を動画で記録する場合、こちらが「こんなシーンを撮りたい」とねらっていたとしても、子どもたちがそのような行動をしてくれることはほとんどありません。何日かぶりに「何か歌らしきものを歌っている」と気づいてビデオを構えると、もう終わっていたということがこれまでに何百回も（実際にはもっと）ありました。そして「その瞬間」は2度とないのです。

データ収集にはこのような苦労もありますが、生活の自然な流れの中で長い時間をかけてじっくりと子どもの行動を観察できるのは、研究者にとって非常に有難いことです。子どもの音楽行動を観察することを通して、子どもにとって、いや、人間にとって音楽とは何かについて、子どもたちは常に私に問をなげかけてくれています。

多くの人に支えられてきた 附属農場と環境教育実践センター

環境教育実践センター教授 梁川 正

今回、副学長の細川友秀先生から本稿の執筆依頼をいただき、私の本学での生活を顧みる良い機会となったことに感謝申し上げます。私はこの広報第116号の「京教学内探訪」において、「今、環境教育実践センターでは」と題して、環境教育実践センターの誕生と現状等を書かせていただきました。ここでは、その記述とできるだけ重ならないように、私の赴任当時の状況とその後附属農場が環境教育実践センターへと変革する中での回想を述べさせていただきます、あわせて多くの人に支えられてきたことに対する感謝の気持ちを表したいと思います。

私は昭和54年11月に産業技術科学科の学科目農学担当助手として本学に赴任しました。そして、昭和55年5月に、附属農場の農場主任を兼務することになりました。それ以来、すでに30年以上になりますが、附属農場と大学藤森学舎の両方において勤務してきました。

私の赴任時、農学担当の教授に伊藤五彦先生、助教授として田淵春三先生がおられました。私はこの両先生のご指導とご援助を受けて本学の教育や自分の研究を進めました。附属農場には当時3名の技官がおられ、みなさんの協力を得て、農場を運営し、授業の「農業実習」等を指導し、さらに、専攻生とともに実験用の植物を栽培しました。そして、それらを大学藤森学舎へ持って行き、実験室で組織培養による増殖やウイルスフリー化、簡便な無菌培養等についての研究を進めました。そのとき、大学の実験室には組織培養に関する設備としてコイトロンがあるだけでしたが、先生方のご配慮により、まもなく特別設備費でクリーンベンチを購入していただき、その後、暗室を培養室に改造し、少しずつその他の培養関係の設備を整えていくことができました。

当時の附属農場には、2棟の木造建物（管理舎、畜舎）と約40 aの畑、約10 aの水田の他、樹木、果樹園、大小2棟の温室、1棟のビニールハウスがありました。木造建物は陸軍時代の建物を移築、整備されたもので、管理舎には講義室、研究室、事務室、農機具および肥料等の収納庫等があり、畜舎では、6頭の牛の肥育試験が行われていました。このような古い施設でしたが、農学を専攻した学生は意欲的に卒業研究

に取り組み、また、「農業実習」等に来る学生も熱心で、みんなで楽しく過ごしていたように思います。この農場時代、毎年11月下旬から12月上旬に「農場



右、管理舎、左、畜舎（平成3年4月）

祭」が行われました。産業技術科学科の学生によって約100羽の鶏を解体して、その肉を売り、出汁を取って鶏そばを作って来場者に販売し、農場内のハボタン株やパンジー等の苗を即売してくれました。当日は、多くの来場者でにぎわい、準備から当日の対応、かたづけ等、懐かしく思い出し、当時の学生はほんとうによくやってくれたなと感謝の思いを持ちます。

授業での利用者の拡大を図るために、昭和56年度から「初等理科教育（小学校教科専門理科）」の授業において植物の栽培実習を始め、他学科、他専攻の多数の受講学生がほんとうに楽しそうに受講していたことを思い出します。また、昭和61年度からは一般教育科目の「近代産業技術Ⅱ」の授業における栽培体験を開始し、平成18年度からは「近代農業技術」と名称を変更して同様に実施しています。さらに、昭和



初等理科教育の授業での栽培実習（昭和56年5月）

63年度からは、幼稚園教諭対象の公開講座として、「幼稚園の自然観察、飼育、栽培実技講座」を開講しました。公開講座はこの年から開始し、これ以後、教員対象や一般市民対象、あるいは、小学生対象のさまざまな講座を毎年実施しています。また、多くの先生方のご配慮により、平成24年度からは「基礎セミナー」での栽培体験も実施し、平成26年度には11専攻で実施することができました。「農業実習Ⅰ、Ⅱ」の授業を平成20年度より大学コンソーシアム京都の「京カレッジ」に授業提供した結果、多数の市民の熱心な受講があり、意欲的な受講学生とともに、多世代が混ざり合って毎年、楽しく実施しています。

附属農場の変革については、農を含むより大きい概念としての環境教育に着目して、当時の学長の蜂須賀弘久先生をはじめ多くの方々のご援助のおかげで、環境教育実践センターが平成4年4月10日に附属農場の場所に設置されて発足することになりました。この設置に伴い、荒木光先生と私が産業技術科学科から離れて環境教育実践センターに専任教員として所属することになりました。この平成4年は大学院修士課程技術教育専修が発足した年で、私は栽培分野の担当として当初から参加して現在に至っています。

環境教育実践センターの新設が認められた際、教授1純増が認められましたので、その空きポストにより、産業技術科学科に栽培を担当できる教員が平成5年4月に補充されました。この環境教育実践センターの設置準備を進めているときに、教育学科（当時）の堀内孜先生から私にタイ国の地域高等教育振興協力のJICAプロジェクトにおける専門家として行ってほしいとの強い依頼を再三にわたって受けていました。教員補充が実現したことで派遣期間を1年から6ヶ月に短縮していただいたことにより、平成5年3月から8月までタイ国のウドンタニに出張することになり、ウドンタニ教育大学の他、近隣のサコンナコンなどの計4つの教育大学の農業学科の教員に対して研究指導と植物組織培養の技術指導を行いました。このときの経験は、本学を留守にすることにより先生方や専攻の院生、学生にはたいへんご迷惑をかけましたが、私にとって貴重な体験ができ、とても感謝しています。そして、平成7年度には環境教育実践センター管理棟新営が決定し、講義室や実験室を持つ管理棟と2棟の温室が平成8年5月に竣工して、教育や研究のための施設、設備が整えられました。

このように多忙な日を送っていましたが、平成10年4月から附属幼稚園の園長に選任されて、附属幼稚園に行くことになり、さらに多忙となりました。幼稚園での様々な生活を送ることによって新たな多くの体

験をすることができ、また、幼稚園の園庭で、園児やその保護者ととも袋を使って野菜を栽培する試みを開始し、この野菜の袋栽培はその後継続されていることを知り、とてもうれしく思っています。

幼稚園児等のいもほり、見学の体験活動については、附属農場の時代、そして、環境教育実践センターになってから現在に至るまで、毎年約2000名の来訪があります。小学生に対する活動については、学校週5日制の実施にあたり、文部科学省が企画した大学等地域開放特別事業「大学子ども開放プラン」への「子どもともに行う作物の栽培体験教室」と題した内容が、平成11年度と平成12年度に採択されて実施でき、さらに、平成14年度からの同省の同事業は「大学Jr.サイエンス&ものづくり」となり、本センターでは「植物栽培と植物の不思議さ体験教室」と題して平成15年度と16年度に採択されて実施しました。さらに、平成14年度からは国立オリンピック記念青少年総合センター（当時）および独立行政法人国立青少年教育振興機構の子どもゆめ基金の助成を受けて「植物の栽培体験教室」を平成16年度を除き毎年平成25年度まで実施しました。いずれの企画も多数の受講者に恵まれ、とくに附属幼稚園の園児の兄弟や卒園児、近隣の小学生、ご父兄のご配慮や協力により、長年にわたって実施することができました。さらに、中学生の職場体験の指導や附属高等学校生徒の植物を育てる体験も実施しています。

また、平成16年度に実験実習棟とともに設置されました「環境教育有機物リサイクルシステム」によって、「植物の生産」→「植物の利用」→「植物残渣の有機物リサイクルシステムによる堆肥化」→「植物の生産」という「食の循環」の教育の実践ができるようになり、さらに、平成24年度の補正予算の措置を受け、平成25年10月に、「環境教育バイオマス利用システム」が設置され、木質バイオマスエネルギーの利用、「資源の循環」の大切さについても啓蒙できるように設備が整いました。

上述のように、幸いにも、教育や研究のための施設、設備が整備され、技術職員や事務局のみなさんのおかげでセンターが円滑に運営でき、とてもありがたく思っています。その中で、多くの受講生と出会うことができ、また多くの専攻生、院生とともに研究を楽しく推進できたことにとっても感謝しています。さらに、センターの事業の実施や管理作業には地域のみなさんや「槐の会」、「京カレッジ」のみなさんに、センターの充実には岡本正志先生に、たいへんお世話になっています。この場から、支えていただいていたみなさんに対して、心より厚くお礼を申し上げます。

「Sカフェ」って何？

～大学生による大学生のための支援プロジェクトやっています～

保健管理センター教授 森 孝 宏

はじめに

保健管理センターは、学生及び教職員の保健管理に関する専門的な業務を行う施設として、心身の健康保持と増進、疫病予防や健康教育などに努めてきました。そのうち特に、ストレスの多い現代社会特有の心に悩みを持つ学生や教職員が、他大学と同じく本学でも決して少なくない状況にあります。そこで臨床心理士や心療内科医師が心の健康相談を相談者の依頼によって予約制で行っていますが、これで十分であるとまでは到底言えないと考えています。

相談者から相談を申し込んでもらって初めて支援が始まるという制度上の限界があります。これは本学に限らず他大学と同じ状況であるのですが、たとえば大学全国調査で、大学生の自殺例のほとんどが、事前に学内相談機関の相談を受けていないことが分かっています。

そこで本学では以前から、入学時に自己記入式の健康調査に回答することで自らの心と身体の状態に気付いてもらえるようにアンケートを行ってきました。しかしながらこのアンケートにも限界がありました。健康調査の結果から心配な状態なので、保健管理センターから学生を呼び出しても、どうしてもセンターに来所しない学生が多くはないものの一定数でてしまいます。強制することも逆にストレスを負荷してしまうので、来所を強く言うこともできずにセンターとしては途方に暮れていました。また健康調査の全ての項目について、あり得ないことですが全て「いいえ」とチェックする学生も一定数いるのです。この結果が正しいとすれば回答した学生は、生物としての人間ではなく、完全に整備されたアンドロイドということですから、これはあり得ません。この2つのタイプの学生は、自らの困難に気付いていない、あるいは目をつぶって問題をやり過ごそうとしている可能性があるようでとても心配しています。さてどうしたらよいのでしょうか。いろいろ考えた末、新たな学生支援策の手を打つことにしました。

センターを来所してもらうことには、限界がありませんから、センターに来所するほどには敷居が高くない相談場所を作ろうと考えました。

1. 「Sカフェ」プロジェクトの始まり

ピア・サポート・カウンセリング演習講座を修了した、学生相談員による、学生のための大学生支援プロジェクト「Sカフェ」を平成24年より始めました。

学生課や各教員、保健管理センターへ相談はしていない初期困難あるいは困難を自覚する以前の状態にある一般学生を対象に、超早期介入の機会設定と正規の学生相談支援ルートに事例受け渡しを目的にしているプロジェクトです。

授業のある水曜日午後3・4時限に開業している「Sカフェ」は、予約なしで自由に来所でき、コーヒーや紅茶、お茶などの飲料が無料で提供されています。そこにはピアサポーター（学生相談員）が、必ず2名以上待っていて、来所学生が必要な場合に話し相手が用意されているスタイルで、学科専攻やサークルなどに居場所がないと感じている学生に対して、アクセスの容易な、敷居の低い学内にある新たな居場所を提供しようとしています。

もちろん守秘義務により、来談の事実や、相談内容の秘密は守られていますので、安心して訪問してみてください。来談者本人の同意なしに、他者への無断情報伝達は決してありません。

2. 「Sカフェ」ピア・カウンセラーの養成経過

カウンセリング演習を中心とする養成講座を終了した学生を学生相談員として認定しています。

平成24年度は10名、平成25年度は3名、平成26年度は2名を認定しました。

平成26年8月31日現在で合計15名の相談員で「Sカフェ」を運営しています。

「Sカフェ」でピアカウンセリングを実践した終了後に、臨床心理士で思春期青年期精神科医師である管理者から、スーパービジョンを毎回受けることで、ピアカウンセリングの継続研修を受け続けていきます。

現状での最も大きな懸念には、今後の学生相談員人数確保があげられます。安定した運営継続のためには新2回生への積極的な広報をしていかなければなりません。

3. 「Sカフェ」の御紹介

時間：授業期間中の水曜日午後3時限・4時限

(12:50～16:05)の時間帯

場所：大学会館三階談話室

利用：本学学生は無料

スタッフ：学生相談員2名、教職員はその場にいません。見張りもいません。

利用状況：平均して利用学生数は1名程度で、同じ時間帯に複数になることはまれですので、安心して試しに来訪してみてください。

4. 「Sカフェ」学生相談員をした感想（平成26年2月23日第19回FDフォーラム、主催：大学コンソーシアム京都、後援：文部科学省・京都府・京都市、学生相談員の学会発表から抜粋）

3回生O君：授業のため相談員養成講座の日程に参加することが難しかった。ロールプレー逐語記録分析を主とするカウンセリング演習がためになった。

3回生Yさん：Sカフェ取り組みの周知、実際の場づくり、運営が難しく試行錯誤してきた。世話話や、趣味の話、恋愛相談、愚痴などを聞いてきた。雰囲気作りをこれからもしていきたい。

以上のように学生相談員の実践から、学部生のうちに学会発表の経験を積むことができました。これからの学生たちの活躍にさらに期待しています。

5. 「Sカフェ」の活動拡大：元気回復セミナー開催

平成25年度から、大学生・院生を対象とした自己効力感や対処能力の増進を目的とするセミナーを始めました。セミナーでは大学院教育学研究科の臨床心理士養成課程修士1年の大学院生にピアサポート（学生相談員）を依頼しています。認知行動療法に準拠した自信回復プログラムを夏季に、教育実習等の人間関係のモデル学習となるような事例研究とグループワークを冬季に行っています。参加料は無料にもかかわらず、参加者が毎回1名程度と少ないので、必要な学生に支援が届いていくようにさらに改善していかなければなりません。

M1（大学院修士1回生）Tさん：認知や対処行動を再検討する演習をした。参加者から来てよかったといわれて、自分も元気が出た。（第19回FDフォーラム発表より抜粋）

6. 「Sカフェ」からの学術研究への発展

援助が必要な学生にとって、はたして自分に援助が必要なことを自己認識しているのだろうかという疑問

を強く持っています。たとえば「いじめられて困っているはずなのに、表面的には平気でニタニタして全く困っていないように振舞っている」いじめの被害者の表情に、同級生も担任も勘違いさせられ、まったく問題がないように、あるいは被害者も楽しんでいると錯覚させられてしまうことがあります。被害者は、家族も含め誰にも援助要請をすることなく、実は自分で自分に援助が必要なことすら思いつかなくなっているはずです。

このことを歴史的にさかのぼると、1928年にたどり着きます。スイス小児神経学、児童心理学者のÉdouard Claparède (1873-1940) が「感情と情動」のシンポジウムで提唱した、メンタライゼーションという概念がその始まりと考えられます。つまりこれはSigmund Freud (1856-1939) の局所論で定義したところの前意識（自分では普段意識していない自分の心）を意識化する心の働きを意味します。このメンタライゼーションがうまく働かないから自分の困った気持ちが心のどこかに隠されて気付けないし、援助を求めても来ないのです。これはその後1935年にMelanie Klein (1882-1960) が、不安や苦痛から心を守り、抑うつにならない（平気なフリをする）ための防衛機制として、躁的防衛やその背後にある自我分裂と名付けた状況でもあるように思えます。

そこで大学生のメンタライゼーションに介入し、援助を早期に求めてもらえるようにする方法論を研究することにしました。躁的防衛や自我分裂をさせないようにする方法論の開発ということになります。この研究は、科研費という文部科学省・日本学術振興会の研究費を得ることができ、メンタライゼーションが研究されている、フランス・パリ心身医学研究所・パリ精神分析協会とイギリス・ロンドンのアンナ・フロイトセンターに在外研究できることになりました。すでに前期学部授業の「健康科学論」では、本年6月に訪問したフランスの状況を授業で学生の皆さんに伝達しました。ロンドンへは11月に訪問しますので、後期学部授業の「心理生理学」で、スライドを使って現状をお見せしたいと思っています。

7. まとめ

以上のように「Sカフェ」は学生支援から始まり、研究や教育にも還元できる有意義なプロジェクトに発展してきました。これからも「Sカフェ」のことをよろしく願いいたします。御利用、御示唆、御意見なんでもかまいませんので、授業期間中の水曜日午後3-4時限に大学会館3階でお待ちしています。

校舎に響く合唱

附属京都小中学校（中高等部）副校長 橋本雅子

本校は、4-3-2制の小中一貫学校としていろいろな取り組みを行っています。

1年生から9年生が集う全校対面式では、9年生が1年生の手を握り入場します。9年生は、母親や父親になったように1年生に微笑みながら誘導しリードします。紫翔祭（体育祭）では、8年生の騎馬に4年生が乗り騎馬戦を行います。学年を超え協力し合う姿がたくさん見られます。紫友祭（文化祭）では、9年生は素晴らしい劇を、8年生は総合学習で学んだ日本文化の和太鼓や箏、踊りなどを発表します。5年生は、1年生から4年生を対象にアントレプレナーの時間に作った品物を売ったり、ゲームを企画し、縁日を出します。1年生から4年生までの子ども達は、お金に替わるチケットを手に、好きな品物を買ったり、体験やゲームに参加したりします。とても楽しい行事です。このように異学年が交流することによって教育的な相乗効果が得られると考えています。まさしくリーダー体験とビギナー体験を繰り返し経験することで、人間関係を形成する力や社会を形成する力が育まれていると思います。



9年合唱

さて、このような取り組みの中で今回は、「合唱」を取り上げてみたいと思います。本校では、6月に5年生から9年生の行事として「合唱コンクール」があります。クラスの団結を図る行事としてこの時期に開催しています。この取り組みを通して協力することは勿論のこと、クラスの一員として役割を果たすことを学びます。9年生ともなると毎年素晴らしい合唱が完成します。心に響く合唱は、誰もが感動しますが完成するまでには、パートリーダーのもと、朝・昼・放課後と練習が続きます。この取り組み期間は、各学年の歌声が校舎に響き渡ります。クラス内でもめることや

上手い出来ないこともありますが、それを乗り越えてこそ、クラスが一つにまとまるのです。小中一貫になって5年生がこの取り組みに参加し、校内に響き渡る上級生の歌声を耳にし、練習の様子を目にするようになりました。すると、先輩達の行動に刺激を受け、合唱に対する関心や意欲が一気に高まりました。5年生も高い目標を掲げどんどん上達していきました。子どもたちの力は無限です。5年生であっても素晴らしい合唱が完成しました。



5年合唱

本校の生徒達は、「合唱コンクール」という感動的な行事を体験し、今年は、8・9年生に習い、5・6年生もNHK全国学校音楽コンクール（小学校の部）に出場することになりました。成績は、8・9年生（中学校の部）は練習の成果を見事に発揮してくれ「金賞」でした。5・6年生（小学校の部）は初めての参加でしたが、本番では美しい歌声を響かせてくれ「銀賞」でした。中学校の部・小学校の部とも素晴らしい成績を収めてくれました。この行事から合唱に取り組むすばらしさと同時に、上級生の姿から下級生が学ぶという小中一貫教育の良さを感じることができました。



合唱コンクール結果発表

2014年度研修旅行を終えて —北海道研修旅行の取り組み—

附属高等学校副校長 市田 克利

台風の接近が心配された7月初旬、7日から10日にかけての4日間という日程で、本校2年生（49期生）の北海道への研修旅行が実施されました。

前年度までの、民泊を中心とした九州地方への研修旅行から、行き先を北海道へと変更することを決定したのは昨年の（1年時の）2学期でした。それから約10ヶ月にわたり、前年度までのすぐれた要素を継承しつつも、さらに良い環境のもとでの充実した研修旅行を目指して、生徒と共に準備をすすめてきました。飛行機や宿泊するファームイン、ホテルの手配など、時間的な制約がある中、研修旅行委員の生徒達は、一生に一度の研修旅行をよりよいものにしようと、懸命に準備に取り組んでくれました。教員や旅行会社の担当者との打ち合わせ、アクティビティ種目や行程などの検討をはじめ、座席表や部屋割り表、しおりの作成など、準備することが直前までたくさんありましたが、それらをひとつひとつ形にして、ようやく当日の朝を迎えることができました。

1日目。京都駅に集合した後、中部セントレア空港に向かい、そこから新千歳空港へ。約1時間45分の空の旅を経て北海道に降り立つと、そこからは長時間のバス移動です。バスが走り出すとすぐに、皆が北海道の広大さを実感することになりました。その後、ラベンダーが満開のファーム富田で記念撮影や散策、そしてそれぞれの宿泊先となるファーム（富良野地区・新得鹿追地区）へと移動していきました。



2日目は農業体験が中心です。今回、生徒たちは10ヶ所のファームに分かれて宿泊しました。各ファームではそれぞれ農業体験を行いました。自然の中で農作業を手伝ったり、動物の世話をしたり、また

収穫した農作物を昼食にいただくこともありました。オーナーさんから色々な話を聞かせていただいて、農業や食料についてより理解を深めるといったファームもあったようです。この研修旅行の目的である「京都では日常触れることが少ない生活や自然、文化を体験することや、地元の人々との交流を通して、自己とは異なる生き方や考え方を知り、自らを振り返る契機とする」を強く実感したのではないのでしょうか。

希望する生徒は、午後からコース別観光（旭山動物園・チーズ工房・サイクリング・青い池）にも出かけていきました。



3日目はトマム方面へ移動してのアクティビティです。ラフティング、カヌー、カーリングなど、北海道だからこそ行える有意義な体験を中心に、大自然の中で各々が希望種目を満喫しました。生徒たちの生き生きした表情と、楽しそうな笑顔からも充足感がうかがえました。

また3日目の夕食後には、ホテルのホールを使って全体レクリエーションがあり、レクリエーション係を中心としたいろいろな企画が行われ、クラスを超えた学年の一体感と熱気が感じられました。



最終日4日目は、早朝から眠い目をこすりながらリフトに乗り雲海テラスへ。壮大な雲海観察…のはずだったのですが、天候に恵まれず、雲海を見下ろすことはできませんでした。生徒たちは口々に「残念！」「雲中観察?!」などと言っていました。確かに残念だったのですが、彼らのようすを見ていると、この思い通りにならなかったことも、きっと忘れられない自

然での体験として心に残ることだろうと感じられました。



朝食を食べた後は小樽に移動して市内散策です。各自が事前に調べておいた目当ての店での昼食（海鮮丼が人気のような）、土産物屋の散策、観光…と自由時間はあっという間に過ぎて、まだまだ立ち去り難しい気持ちのまま空港へと移動し、夕方には無事京都に帰ってこれることができました。

この研修旅行を通じて、生徒たちは多くのことを感じ、学ぶことができたと思います。広大な北海道の自然、人との出会い。そして、わずかな時間でも実際に土に触れることによって、農業や畜産業への認識や、食べることへの意識が大きく変化したのではないかと思います。

もちろん旅行期間中だけではなく、準備や事前学習、ファーム（宿舎）やアクティビティの選択といった様々な場面で一生懸命に取り組み、自分たちで研修旅行を創りあげてきたからこそ、この4日間がさらに輝かしいものになったのだと思います。

2学期には、研修旅行の事後学習として「研修旅行写真展」が行われます。そこで生徒たちは、改めてもう一度、この旅行を振り返ることになり、北海道で見たもの、感じたこと、知ったこと、学んだことを思い出してくれるでしょう。そんな生徒たちの思い出がいっぱい詰まったたくさんの写真をみることを、私も楽しみにしています。

リニューアルされた中学部高等部棟

附属特別支援学校副校長 高岸正司

私たちの学校は、昨年度そして今年度と校舎の改修に取り組んでいます。昨年度は中高等部、今年度は小学部と職員室のある本館です。この改修で大切にすることは、教室を閉鎖的な場ではなく、屋外の学習環境とつながるような広がりのある学習空間とすることで。昨年度は、今まで2階にあった高等部の教室を1階に移し、屋外とのつながりがある空間にし、中学部の生徒との合同の学習がより充実するように考えました。

引越も学習

中学部高等部棟の改修時には、本校の「生活」という授業で、生徒たちが「引越」を題材にして様々な学習に取り組みました。段ボール箱の組立やスチール本棚の解体、そして本などを箱に入れ、荷物を仮教室に運ぶこともしました。このような学習を繰り返す中で、生徒たちも、「次は、この場所が教室」という見通しがもて、新しい場での学習にもスムーズにはいることができたようです。



中学部と高等部をつなぐレンガ道作り

中学部高等部棟の改修が終わり、中学部生徒が取り組んだのがレンガ道作りでした。中学部教室横の木工室から1階に移ってきた高等部3組の教室まで、カラフルなレンガで道を作りました。少し曲がりくねっていて、自然と歩きたくなるような小道です。教室からは高等部3組が育てているもち米の田が見える素敵な場所になりました。生徒たちが、この場に手を加え、自分たちの



「思い」で居心地のよい場になったらと考えています。

多目的教室の取り組み

中学部高等部2階には、教室の壁を取り去り広い多目的教室を作りました。パーティションを使って部屋を細かく仕切り国語数学の教室として利用したり、研修会やバザーを行なったりと本当に多目的な部屋として生まれ変わりました。



美術作品ギャラリー

同じ2階には、リニューアルした音楽室に美術室もあります。音楽室は段差をなくしフラットで広い面積を確保しました。また、美術室も面積を広くし、自然な光と風がはいるように窓部を上げました。廊下には、新しく美術作品ギャラリーを設けました。



最後に

来年の2月には、小学部棟本館の改修が終わります。子どもたちが、教室という枠にとらわれることなく、学校全体を学習の場と捉え、教室・広場・森・山で様々な「こと」を学ぶ中で、人と共に生活をつくっていく主人公になってくれることを願っています。

教育神経科学の未来

数学科教授 黒田 恭史

今年の4月に数学科に着任しました。それまでは、京都の佛教大学教育学部に勤めており、小学校、及び中・高等学校数学教員養成に携わってまいりました。

専門分野は、数学教育学で、とりわけ脳、視線、脈拍等の生体情報と学習との関係を研究しています。世界では教育神経科学という新しい学問領域が構築されつつありますが、日本では少し立ち後れている状況にあります。世間に流布している誤った脳科学と教育の情報を正し、望ましい脳科学と数学教育の関係のもと、研究・教育に貢献することができればと考えています。

算数・数学は、国内外の学力調査の実施や、保護者からのニーズの高さなど、社会から注目される教科の

一つです。学生教育においては、それぞれの子どもの発達過程、認識特性を科学的に分析・解明し、適切な教育内容を構築・実践することのできる力を身につけさせていきたいと思います。現在、京都府内をはじめとして、近畿圏の学校現場の先生方と継続的に連携を取り、算数・数学教育の研究交流を行っていますが、本学の学生も引率して、そうした最先端の授業研究に触れさせるようにしています。こうした取り組みが、学生時代だけでなく、卒業後も実践と研究を連動させながら成長し続けることのできる教員養成につながっていくと考えています。

今後ともどうかよろしくお願いします。

教師という仕事の魅力

教育支援センター准教授 今野 勝明

今年度より、京都府教育委員会からの特命教員として教育支援センターに勤めております。私は、本大学を卒業後、京都府立高等学校の教諭（理科担当）として12年間、京都府教育庁に5年間勤めて参りました。また、大学では、これまでの経験を生かして実地教育や就職支援の分野で学生の指導をするとともに、京都府教育委員会との連携に係る業務を担当しております。

さて、私が勤めておりました京都府では、教員採用試験において「教師になって、よかった。その感動、京都府で一緒に味わいませんか？」というキャッチフレーズを使っております。この言葉が示すように、教師という仕事は大変魅力的な仕事だと私自身感じながら教員生活を送ってきました。しかし、この魅力を言

葉で伝えることは難しく、またその内容も教師毎に十人十色だと感じています。

これから教師を目指す学生には、是非積極的に学校現場へ足を運んで実践力を高めるとともに、先輩の先生方が何に教師という仕事の魅力ややりがいを感じて頑張っておられるのかを知って欲しいと思います。きっとそうすることで、自分のなりたい教師像が見えてくることでしょう。現在は、ボランティアやインターンシップなど学校現場で学ぶ方法はたくさんありますので、自分の学びに合ったものを選択してください。

上記の活動を含め、広く教師を目指す学生の支援をしていきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

教師養成の一助となれば — 高校教師の経験をいかし —

大学院連合教職実践研究科教授 石川 美智子

私の主な研究テーマは、学校心理学です。高校の相談係を25年以上務めてまいりました。学校における開発的生徒指導や困難をかかえた生徒および保護者の支援の研究をしています。特に、チーム援助形成し促進する「コーディネーター」の研究を行っています。不登校生徒ばかりでなく、発達障害や自殺未遂・非行傾向などの生徒やその保護者の援助を行ってきました

実は、高校では家庭科の教師を務めていました。長く大学院に通いながら、教師をしていたため、心理学

等の研究をいかし、高校の授業として実践することが、人より苦にならなくなりました。家庭科の実践研究もしてきました。

食べ歩くことが大好きです。京都はおいしい食べ物屋さんがあるようです。是非紹介してください。大学教員としては、4月に着任し新任教員です。佛教大学から派遣されて、大学院連合教職実践研究科に所属しています。学生・院生が教師になることの一助になればと考えております。よろしくお願いいたします。

未来を拓く教育のために

教職キャリア高度化センター・大学院連合教職実践研究科教授 橋本 京子

平成26年4月、教職キャリア高度化センター、大学院連合教職実践研究科に着任いたしました。

本年3月31日まで京都府の教員として、小・中学校、京都府総合教育センターに勤務し、精華町立山田荘小学校の校長として定年退職を迎え、新たに本学で教師教育の任をいただきました。

36年間、国語教育を中心に「ことばの学習を基盤として豊かな人間性を培う教育」に取り組み、最終赴任校では、21世紀を生き抜く子どもの育成を「人間力活動科」(文部科学省 研究開発校)の中で取り組んできました。

こうした教育活動の中で大切にしてきた教育的愛

情、共に働く仲間との絆、未来への展望などを踏まえ、21世紀を切り拓く子どもの教育を担う人たちのために努力したいと願っています。

初任校の中学校で生徒指導に悩んでいた時、坂本真民の詩「あとからくるもののために」に心揺さぶられた思い、かけがえのない子ども達の成長過程、困難を打開するチーム力など、様々な教育の厳しさの中の醍醐味や願いを教員を目指す学生達に伝えたい、そして現役の先生達を励ましたいという思いを込めて任に当たり、私自身学び続ける教員として共に成長していきたいと考えています。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

笑顔で向き合う

高槻市立磐手小学校 教諭 池原 史明
(体育領域専攻 平成21年度卒業生)

大学を卒業して5年目の春を迎えた。初任から4年間お世話になった茨木市立大池小学校を離れ、現在は高槻市で転任1年目の大変さを実感している。

初任での1年間は本当に苦勞の連続だった。一つのクラスを任されるということの重み、周りの先生方との力の差、痛感せずにはいられなかった。先生という職業の理想と現実とのギャップに大変な衝撃を受けた。今まで自分が積み重ねてきた自信が潰れてしまいそうになっていた。

そんな時、私の心を支えてくれるものが3つあった。1つ目は、クラスの子どもたちである。いつもどんなときでも、かれらは「笑顔」で私を迎えてくれた。2つ目は、家族である。どれほど辛いことがあっても、家では家族が「笑顔」で私の心を癒やしてくれた。3

つ目は、体育である。今までのスポーツ活動や京都教育大学で培ってきた経験もあり、体育の授業では、自信を持って「笑顔」で子どもたちと授業に取り組むことができた。

苦しいことや、辛いことはきっと誰でも経験があると思う。人それぞれ色々な感情があるので、落ち込んでもいいし、泣いてもいい。けれど、いつまでも下を向いてはいられない。未来に向かって、たくさんの人と「笑顔」で向き合い、一步一步前進すること。それが、私にとって、そしてなにより子どもたちにとって必要なことなのだと感じた。これからも、この「笑顔」を忘れずに、子どもたちと共に日々成長していきたいと願っている。

『人とのつながりを力に』

京都教育大学附属京都小中学校 教諭 小澤 雄生
(技術科教育専攻 平成18年度卒業生)

東日本大震災発生当時、私は東京ディズニーランドで中学3年生の卒業遠足に行っていた。液化化している道をバスが走っている駅まで生徒と歩いて帰ったのを思い出します。初任校へは、その5年前に着任しました。

大学卒業後、東京都に採用されて、ある区の教育委員会へかばん一つ持って着任先を聞きに行きました。春休みが終わろうとしている頃で、住むところを見学せずに契約したぐらいぎりぎりでした。

その日から、右も左もわからない場所と仕事に追われる毎日が始まりました。初任校は、ベテランの先生ばかりで、若い先生は私が異動するまで入ってきませんでした。まわりの先生は、東京でも有名な先生ばかりでした。とても勉強になった初任校でしたが、すごい先生たちだなと感じたことがたくさんありました。

共通していたことは、授業が端的でわかりやすい。生徒の変化をすぐに見つけ、一人一人に時間をかけている。人の話を聞き入れる。自分より下の先生の面倒を見てくれる。それ以外にもたくさんありますが、怒

るときは本気で怒り、楽しむときは楽しむとはっきりしている。そして、大人にも子どもにも好かれていることが全てを物語っていたと思います。

本校で3校目になりますが、つながりを大切にしていたため、縁があって京都に帰ってくることができました。震災の時に卒業した生徒も今や大学生になりましたが、まだ交流があります。初任校は、自分の子どもを入れたいと思う学校でした。人とのつながりをつくるのは時間がかかります。しかし、その時間をかけた分が自分にプラスになってかえってくると思います。自分が育てた生徒であったり、まわりの先生であったりと人と人をつなぐ仕事でもあると思います。決して驕らずに様々な部分で気づいて築くことができる先生がすごい先生だと思います。私もそのような先生を目指して勉強し続けたいと思います。

成長し続けるためには、様々な人と出会い、つながりを大切に学ぶ姿勢をもつことが自分の力となることでしょう。

最初の外国人留学生とインドネシア海外調査

京都教育大学名誉教授（教育学科心理学研究室） 矢野喜夫

私は1974年の11月という異例の季節に、京都教育大学教育学科心理学研究室助手に採用されて就職しました。28歳のときでした。就職する直前の10月下旬、最後の学生の身分でインドネシアに、海外調査研究のためのいわば一人先遣隊として単身で行くことになり、帰国直後に着任するという特異な就職の仕方を行いました。当時、教育学科発達心理学主任教授の故岡本夏木先生が代表者となり、特殊教育学科（現発達障害学科）の野村庄吾先生がマネージャーになって、インドネシアと日本の子どもの比較発達心理学分野の文部省科学研究費補助金海外調査計画があり、私など他大学院生も発達心理学研究会の縁で、そのグループに入れてもらっていました。

そもそもインドネシアとの結びつきは、京都教育大学で最初の外国人留学生となった野村先生指導の中国系インドネシア人女性スハルティ・ハルトさんの存在によるものです。スハルティさんはジャカルタの出身でしたが、私たちの調査研究対象地は、京都と姉妹都市であるジャワ中部の古都ジョグジャカルタ（通称ジョグジャ）とし、その地の国立ガジャマダ大学の心理学者に共同研究者になってもらうために、その大学の心理学科主任教授と会って話をつけることが私の役目でした。インドネシア国内での外国人研究者の調査研究は、単独では許可されなくて、必ずインドネシア側研究者との共同研究でなければならなかったのです。

インドネシア語は、それまでにスハルティさんに何人かで初歩を習っていましたが、会談できるほどではなく、英語も心もとなく、海外旅行自体それまでしたことのない私が、一人でインドネシアに行くことは、まったく心細いものでした。初めて一人でインドネシアに行くためにシンガポール行きの飛行機に乗っているとき、雲海の上でふと、「私はなんでこんなときに、ここにいるのだろう」と不思議な実存的気分になったことを覚えています。



滞在宿舍近く盲学校訪問で校長教員の人たちと：
中央岡本先生、左から2人目野村先生、その前が私
（インドネシア・ジョグジャカルタ、1976、印画写真）

現地調査滞在を含むインドネシア・ジャワと日本・京都の比較文化的発達心理学分野の海外調査研究は、当時もおそらく現在でも珍しく、ユニークな研究プロジェクトでした。研究メンバーには当時奈良女子大学の清水御代明先生や滋賀大学の千原孝司さん、追手門学院大学の落合正行さんなども加わり、1976年7～8月にジョグジャに滞在して調査研究をしました。子どもの連想反応や図形模写、描画、遊びなどの研究テーマごとに毎日、調査・実験計画を作り、ガジャマダ大学に打ち合わせに行ったり、ジョグジャ市内や郊外の学校や農村に行き、見学や観察をしたりしました。後で実施して送ってもらうよう実験や調査の依頼をしたり、学校や幼稚園、盲学校などの見学に行ったり、子どもの遊びの観察を行いました。その調査研究結果は“Javanese and Japanese Children”と題した調査研究報告書になりました。

清水先生中心の子どもの連想研究は、単独の科学研究費補助金（代表者は同じく岡本先生）による共同研究として、その後何期かにわたって続き、日本の子どもの連想基準表として「子どもの連想」やその他のいくつかの研究報告書になりました。

私は教育心理学助手として、その後10年くらいの間、通常の研究室助手の教職務以外に、それらの科学研究費申請書類や予算管理、報告書作成などの事務を担当しました。私は、その仕事をさせてもらうことや、その後いろいろな形で続いた他大学研究者・院生を含む岡本先生を中心にしたオープンな発達心理学研究会で、ひじょうに多くのことを学ばせてもらいました。発達心理学については岡本先生から、学び直しさせてもらったようなものでした。岡本先生には足下で学問的・人間的に親しく接触させてもらい、心理学徒として人間として私は決定的な感化を受けました。その後私は、定年まで30年以上もの長い間、教育学科心理学教員として居続けさせてもらうことになりましたが、その始まりがこういうことです。



小学校訪問で生徒たちと：生徒の後ろに私たち
（インドネシア・ジョグジャカルタ、1976、印画写真）

学生広報委員会の紹介

学生広報委員会の立ち上げについて

学生広報委員会は、学生が発見した「京都教育大学の魅力」を、学生が広報の担い手として発信していくことで、地域社会の方々身近に感じてもらうことを目的に今年度からスタートしました。

彼らの最初の活動は、彼ら自身が取材から記事の執筆・構成までを行った、広報誌kyokyoへの寄稿です。「京教の蚊」をテーマに、学生ならではの視点と発想からレポートされています。第1回の今回をステップに、これからも活動を継続していく予定です。それでは、将来は子どもたちのメディア・コミュニケーション教育にも関わっていく「教員のたまご」でもある、5名の学生広報委員をご紹介します。

(本活動は、京都新聞社と本学との新聞を活用した教育推進に関する協定に基づき、京都新聞編集局の協力を得ました。)

一 (はじめ)

国語領域専攻二回 大井陽太

京都教育大学に進学を考えている高校生の皆さん、こんにちは！私たち学生広報委員会が発足した目的の一つとして、“学生目線から見た京教”を学外に発信していくことが挙げられます。今回はその第一弾として“蚊”について取り上げましたが、本学に存在する「蚊と上手く付き合えるようになって一人前の京教生」という名(迷?)句に相応しい内容になったのではないのでしょうか。上々のスタートとなった今回よりもさらに上を目指すべく、私たち自身が楽しみながら筆をとり続けていきたいと思っております！

京教の良さを知って・・・

社会領域専攻一回 奥田大揮

私が京都教育大学に入学する前、京教と言ったらこれ！というようなものがあまりありませんでした。あるとしても大学のカリキュラムや各領域の情報などで、入試に必要なだからと血眼になって探した経験があります。オープンキャンパスにも何度も行ったことがあります。良い雰囲気は感じられたものの、内面の良さまでは感じることはできませんでした。(上回生ともっとお話しすればよかったと後悔しました)京教の学生となった今、京教の本当の良さを多く感じるこ

とができます。京教はとてもアットホームな雰囲気です。学生間の距離が近いです。しかし、アットホームであるが故に京教の良さは表面化しづらい。だからこそ、この広報委員会で京教の良さを伝えることができたなら嬉しいです。最後に今回記事の作成に協力していただいた方々、関係者の皆様、ありがとうございました。

何事も経験

社会領域専攻一回 山中翔太

学生広報委員会の誘いを受け、その仕事の具体的な内容もよく理解しないままO.K.してしまった。その結果、苦手なインタビューや作文をしなければならなかった。しかし、原稿をすべて書き終えた今振り返ってみると、学生広報委員会に入ってよかったと思う。新聞社の人と話し合ったり、普段はなかなか勉強しないような課題を深く掘り下げて勉強するなど、委員会に入らなければなかなかできない経験ができたと思う。何事も経験と思って、頼まれた仕事を受けるのもいいなと思う。

読ませる記事を！

教育学専攻一回 櫃割仁平

広報を作る上で最初に考えたこと、それは読んでもらうということです。「蚊」という少し変わったテーマを設定したのもそのためです。京教生にとっては生活の一部といっても過言ではない蚊ですが普段は何気なくしか見ていません。ひとつのことを徹底的に追求するとこんなにも興味深い記事になるんだなあと感じました。

広報委員を経験して

社会領域専攻一回 坂口 諒

僕は最初に「学生広報委員会に入ってみないか」と先生に声をかけていただいたときは、正直あまりやりたいとは思っていませんでした。また、僕は文章を書くのがあまり得意ではなく、こんな僕が入って何か役に立てるのだろうかとも思っていました。しかし、実際に広報誌をつくるとなると文章を書くだけでなく、そこまでの取材や、構成を考えたりするということが必要となります。ですので、文章を書くことが苦手な僕でもその他のことで役に立てます。今回は少ししか参加できませんでしたが、広報誌をつくるという経験ができた良かったです。

学生広報委員会とは

学生や先生、学外の人に京都教育大学についてより深く知ってもらうために、学生の視点から情報を発信する委員会。(メンバー 国語領域専攻 2 回大井陽太、教育学専攻 1 回櫃割仁平、社会領域専攻 1 回奥田大揮、坂口諒、山中翔太)

京教の蚊は特殊？！

第 1 回目の今回は、twitter でも話題になったこともある「京都教育大学の蚊は教授によって品種改良されたため、普通の蚊よりも強い」という噂について調査した。また、オープンキャンパスにきた高校生に、「京都教育大学は蚊が多い」と感想文に書かれるほど蚊が多く、蚊に悩まされている京教生も少なくないはずだ。そこで、なぜ京教には蚊が多く生息しているのかも調査した。



美術領域専攻の学生たちによって描かれた京教の蚊のイラスト

京教の蚊はやっぱり強い？

みなさんは今まで数えきれないほど多くの蚊を潰し、刺されてはその度に痒みに悩まされてきただろう。しかし、これほど身近な害虫にも関わらず、種類どころか発生源すら知らない人も多いはずだ。京都教育大学ではもちろん、普段の生活でも辛い痒みをできるだけ軽減するためには蚊について正しい知識が必要だ。これを機に皆さんにも蚊に対する知識を身に付け、ぜひ対策をとってほしいと思う。

まず、蚊の種類としては日本だけで約 100 種類存在

学生広報 委員会

今年もよく ～京教の

し、うち 30 種ほどが人に対して吸血行為をする。普段私たちが目にする蚊は主にヒトスジシマカ、アカイエカ、チカイエカ、オオクロヤブカなどの蚊であり、どれも痒みを伴う吸血を行う。

動物生態学を研究されている今井健介准教授によると「その中でも大学構内で見られる蚊はオオクロヤブカ、ヒトスジシマカの 2 種であり、特にオオクロヤブカが構内には多く、学生を悩ます強い痒みはこの蚊が原因ではないか」ということだ。このオオクロヤブカは森林などの自然地帯を主な生息地としており、とても大きい。蚊が吸血を行うための麻酔をすることで私たちはアレルギー反応を起こし痒くなる。オオクロヤブカは主に人間ではなく他の動物を対象とした吸血を行うために、強い痒みは麻酔成分を多めに注射されているためかもしれないという。

では、これから蚊に悩まされないためにはどうしたらいいのか、対処法を今井准教授に聞いてみた。1 番の対処法は蚊の発生源を無くす、つまり、ボウフラ(蚊の幼虫)の発生源である水溜まりをなるべく無くすということだ。水溜まりといっても池などの大きな水溜まりは問題ではなく、放置されたバケツや手水鉢、廃タイヤなどに溜まる水に多く発生するため、これらをなくすことが重要だそうだ。みなさんも自分の周辺に



実際に京教に生息する蚊

刺された！！

蚊特集～

水が溜まっている物があれば水を捨てるなど各自で対策を取ってほしい。しかし、どれだけ発生源をなくしても完全に蚊がいなくなることはない。そのため、蚊がたくさんいる日陰や特定の場所を避けることが最終的な対策となる。京都教育大学の蚊の生息スポットを記したマップを作ったので、それを参考にしてくれたらよいと思う。

水辺以外でも要警戒

今回、京都教育大学のどのような場所に蚊が多く生息しているのかを明らかにするため、キャンパスマップを用意し、京教の学生約100人に蚊によく刺されると感じる場所にシールを貼ってもらうアンケート調査を実施した。(マップ参照)

体育館周りはよく刺される！

運動中は刺されにくい？

池・藪の周りではよく刺される

調査の結果、1番被害が多く出ているのは体育館周辺であることが分かった。ここは藪があり、日陰となっているため蚊が多いと考えられる。また、C棟ロビーや理科実験棟、文化会BOX周辺も藪があるうえ、池も近くにあるので被害が多いと考えられる。そして、このマップを見て、食堂でもよく刺されているということに疑問を感じた人も多いはずだ。その原因として、大学会館の中庭に池があることと、食堂は人の出入りが多いので、人と一緒に入ってしまう機会が多くなる、ということが考えられる。



気のせい！？

「京都教育大学の蚊は先生によって品種改良されたのか？」という疑問を解決するために、理学科の梶原裕二教授に取材したところ、蚊の品種改良はされておらず、学生の間で広まった単なる噂であるだけだそう。蚊の品種改良はされていないことが分かったが、「蚊にたくさん噛まれてこそ1人前の京教生だ」と言われるほど、京都教育大学にはとても多く蚊が生息しているのはいったい何故だろうか。梶原教授によると、普段自然が少なく蚊がほとんど生息していない都会で生活している私たちが京都教育大学のような自然があり、蚊がある程度生息している環境にくることで、蚊が特別多く生息していなくても心理的に蚊が非常に多いと過剰に感じてしまうことが原因だそう。つまり、京都教育大学には蚊が特に多く生息しているわけではないが、心理的に多いと感じてしまうということだ。

また、梶原教授のお話によると、蚊の発生を防ぐ方法の1つとして、メダカは蚊の幼虫であるボウフラを食べてくれるので、池にメダカを放つことでボウフラの発生を防ぐことができるという。蚊の発生を防ぐためかどうかは定かではないが、理科担当の先生がC棟ロビー前の池にメダカを放してくれているそうだ。

第 134 号の読者の皆さまへ

京都教育大学広報誌「KYOKYO」をお読みいただきありがとうございました。
より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。
広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522

京都市伏見区深草藤森町 1 番地

京都教育大学総務・企画課気付「地域連携・広報委員会」

E-mail : kouhou@kyokyo-u.ac.jp

134 号編集後記

広報誌「KYOKYO」第 134 号をお届けいたします。本号の特集は「教職キャリア高度化センターが発進します」です。

昨年 10 月、本学は「学び続ける教員」を支援することを目的に、大阪教育大学、奈良教育大学と連携し、「教員養成高度化連携拠点」の 1 つとして、「教職キャリア高度化センター」を設置しました。

特集では、同センターの概要や取組について、センター長をはじめとする 6 名の教員に執筆していただきました。

また、今号から新たに「学生広報委員会」のコーナーを設けました。これが彼らにとっての初仕事となりましたが、学生ならではのユニークな感性で、取材に誌面のレイアウトにと奮闘してくれました。今後も更に活躍してくれることと期待しています。

今号の表紙を飾るのは附属京都小中学校初等部の宋 亮太郎さんの作品、裏表紙は同じく荒川 大和さんの作品です。力強いタッチと鮮やかな色彩をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長 細川 友秀



地域連携・広報委員会

委員長	細川 友秀				
副委員長	丹下 裕史				
委員	濱田 麻里	齋藤 正治	西村佐彩子	吉江 崇	相澤 雅文
	平井 恭子	Andrew Obermeier	井谷 恵子	佐藤 忠司	
事務担当	総務・企画課				



京都教育大学広報 第134号

発行日
2014年10月31日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
<http://www.kyokyo-u.ac.jp/>